桜舞う日

さつきひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜舞う日

【Ｎコード】
Ｎ６９３９Ｗ

【作者名】
さつきひろ

【あらすじ】
ごくありふれた女子高生、桜。
ある日、緋月と名乗る少女が目の前に現れたことから、平凡から遠ざかっていく。
繰り返し見る夢の記憶と、脳裏にちらつく青年の面影。
それは、かつて、桜の魂であったものが経験した、もうひとつの人生だった。

1

梅雨時だというのに、珍しく快晴だった。
そろそろ本格的な暑さが始まろうかという気配を含み、空気はこの時期特有の湿った重さを持って身体に纏わりつく。一日やそこら晴れた程度では、この鬱陶しい湿気を解消することはできないらしい。
そもそも、日本の夏は湿気が多いのだ。
それでも、降り続ける雨に室内に閉じ込められる日々が続いて悩まされることに比べれば、過ごしやすい日だ。雨につられてじめっとしていた気分も、多少なりとも爽やかなものに変わることに間違いはなかった。
そんなありふれた日の、昼下がりである。
新学期が始まってから、既に二ヵ月ほど。入学した当初のぎくしゃくとした様子はだいぶ薄れ、それぞれにグループなども出来上がっているような頃合いだ。
そんなグループ分けも何も関係なく、このクラスは変なことに熱中していた。それも、何故か、昼休みを利用しての恒例行事である。飽きもせず、毎日のように続けられているクラス内対抗ドッジボール大会と名付けられたそれが、今、佳境を迎えようとしていた。
さして広くもない中庭には、教室から持ち出して来たチョークで歪なコートが書いてある。クラスを紅白の二チームに分け、それぞれがその日の放課後の掃除当番を賭けての大熱戦が、連日飽きもせずに繰り広げられているのである。
ここ数日は雨続きで外に出られず、この大会も微妙に停滞していた。もはや日課になっているそれが行われなかったその反動なのか何なのか、いつもよりも騒ぎが大きくなっているように思える。
何しろ、久しぶりの太陽に忙しくするのは、一部の人間に限ったことではないのだ。長雨におとなしくしていることを強いられたフラ

ストレーションは、相当に大きい。
とは言え、こんなことに、貴重な昼休みをつぶしている理由がどこにあるのか、わからない。暑い日にわざわざ更に汗をかくような遊びに興じているなんて、理解の範疇外だ。
かと言って、既にクラスの恒例行事になっているものを、無視しているのもどうかと思う。バカの一つ覚えのように毎日同じことで大騒ぎをしているクラスメイト男子を見やり、小柄な少女は窓際で溜め息をついた。
久々に晴れて気温は上がったものの、今朝方まで降っていた雨のせいで湿気は高い。天然パーマ気味の髪がもっさりと広がるのが、腹立たしくて仕方がない。片手で髪を押さえながらも、一応は応援のふりをして窓から外を眺めるしかなかった。
「桜！　ほら、応援したらいいよ！」
わずかに上ずった声を張り上げて、脇からもう一人の女子生徒が腕を掴む。
桜、と呼ばれた少女はほんの少し小首を傾げ、促されるようにしてもう一度視線を戻した。
コートの向こう側から、一人の男子生徒が手を振っている。同じクラスの佐山武だ。無駄に張り切り、どうでもいいことにこれほど熱くなっている辺りは、理解できない。始まる前はだるいだの何だのと文句を言っていたくせに、始まったら始まったで大騒ぎだ。このテンションで午後の授業が受けられるかと言えば、そんなはずもなく、八割の確率で沈没しているのが常だ。
「佐山くん、桜のこと気にしているみたいだし、応援してあげたら張り切るんじゃない？」
正直、どうでもいい話だ。
誰それが付き合っているだの、誰が誰を好きだの、周りの少女たちはそんな話が大好きらしい。桜は全くその手のことに興味も持てず、周囲からは変人扱いされている始末だ。
「そういうの、よく、わからないし……」

「また、桜はそんなこと言って」
ダメだよ、そんなんじゃ。と、腕を掴んだ少女が溜め息混じりに言う。
「でも、本当にわからないし、そんなことより図書館の方が」
「恋愛をそんなこと呼ばわり！　それじゃダメよ、桜！」
やたら大仰に嘆かれ、桜は困ったように笑った。
本当に、わからないから困る。だけど、そう言うとダメだと言われてしまうのだ。
男子のやっていることも理解できないけれど、友だちの言う恋愛モードも、それはそれでよくわからなかった。
そんな桜の疑問を他所に、熱戦は相変わらず続いている。
この勝負で負けた方が、本日の掃除当番になるのである。元気のあり余っている高校生男子のやることとしては妥当なことかもしれないが、怠惰な昼休みを過ごしたい者にとっては迷惑な話だ。
かと言って、クラスの和とやらを、蔑ろにしたいわけではない。
勝負の景品と言っても、たかが放課後の掃除当番から解放されるだけのことである。割り当てられたのなら、それに従っておとなしく掃除をすればいい。
だというのに、何をそこまで熱くなるのか、と疑問に思わなくもない。だが、おそらく、問題は掃除当番ではないのだろう。雨が続いていたせいでたまった苛々が、そこにぶつけられているに違いない。
ぼんやりと見ているうちに、どうやら勝負の行方は決まりかけているらしい。
先ほどの佐山がいるチームが劣勢らしく、頑張れと喚いている。これ以上何を頑張れと言うのか、と、周囲がくすくす笑い始めた。何しろ、コートの中に残っているのはたった一人なのだ。
残りは一人だ、やっちまえ。とでも言いたげな集中攻撃を必死に避けながら、たった一人残った人影は、コートの向こう側の相手に何事かを怒鳴り返す。こうなってしまったからには防御に徹するし

かないのだろうが、多勢に無勢はさすがにきついのだろう。顔つきはいやに真剣だ。
見ているだけの女子生徒もさすがに気の毒になってきたのか、きゃーきゃー言う声も静かになったようだ。
勝負は決まっているというのに頑張っているその男子生徒は、クラスでも一番小柄だ。その小柄な身体を活かした敏捷さでもってこの状況を作り出したわけなのだが、本人としてもあまり楽しくない時間なのかもしれない。
件の男子生徒――西野拓弥≪にしのたくや≫は、誰もが振り返るような目を引く美形、というのとは違う。運動神経にしても、すばしっこい以外には運動神経に秀でた様子を見せるわけでもない。それでも、人懐っこい笑みを浮かべてにこにこと寄って来られたら、十中八九「可愛い」と言われるようなタイプだ。女生徒からは一定数の人気がある、得な性分である。
「……ちょ、ちょっと待てっ！　何で、ここで集中攻撃が始まるんだ！？」
集中攻撃の的になりながらも、狭いコートの中を所狭しと逃げ回っている。その上で一人で騒いでいるのだから、元気があり余っている筆頭なのかもしれない。とうに諦めたのか、既に誰も相手にしていない。
何しろ、彼のいるチームは、既に全員が外野に出されていて、コートに残っているのは、彼ただ一人なのだ。その時点で、もはやこちらのチームの負けは決定しているはずなのだが、なかなか試合は終わる様子がない。最後の一人を討ち取るまでは、と、妙な方向に燃えているらしく、終わらないようである。
「昼休みが終了するまで、あいつが逃げきる方に学食のランチ一回分」
「じゃ、逃げきれずに終わる方に二回分」
必死になっている本人を完璧に無視して、違う話題に話を咲かせる薄情なチーム・メイトたちである。しかも、勝敗とは関係のない

部分が賭けのネタにまでなっている。
「頑張れよ、西野。負けたら殴るぞ」
「何だそれは！」
いつもと変わらない、クラスメイトたちの呑気な会話。それは、桜にとっての日常の風景だった。

結局のところ、最終的な結論からすれば、勇者・西野は昼休み終了まで無事に逃げきった。
しかし、逃げきれない方に賭けていた者が多かったらしく、理不尽なことに盛大に文句を言われた。ついでに言えば、やたらと小突き回されてもいた。
とは言え、その賭けとは別に彼のチームが負けたことに変わりはない。たとえどんなにアホくさくても、毎日の決めごとは決めごとだ。現在は、負けたチーム全員で、放課後の掃除に真面目に勤しんでいる。女子はその賭けには全く関係ないから、いつもの当番通りなのは当然のことだった。
「大体さぁ、西野が妙に逃げ回るのがどうかと思うんだ。普通はあそこまでやられたら、アウトだろ」
いつまでも負けたことをぐちぐちと言い募る佐山に、桜は思わず笑いそうになった。それを聞いた西野が、ムッとして薄情な友人を睨む。会話を聞く限り、佐山は西野が逃げきれない方に賭けていたらしい。
仮にも友人なら、逃げきる方に賭けるべきじゃないのかと言いたくなる。それは、いわれた西野も同じだったらしい。
「人のせいにするな」
じろりと睨まれても、佐山にはまるで堪えた様子がない。おそらく、聞いてはいないし、そう言っている西野にまるで迫力がないせ

いかもしれない。
大体、明日になったらまた同じことで騒ぎを繰り返すに決まっている。だったら、今日は今日で諦めればいいものを、何だって蒸し返すのかその気が知れない。
とりあえず、余計なお喋りを先生方に怒られる前に掃除だけは済ませてしまうのがいい。気を取り直して箒を持ち替えた桜は、ふと背後からの視線を感じて顔を上げた。
誰かが、自分を見ている。
それは、直感だった。
何かに教えられたとか、そういうことではない。はっきりと、誰かが自分を見ていることを感じてしまったのだ。
周囲には、自分たち以外に人影はなかった。校舎の中から、部活動らしい喚声とざわめきが聞こえるだけだ。
けれど。
確実に、何かの瞳が桜を捕らえていた。何を根拠にそう思うのかを考えるよりも先に、視線を感じた方向を振り向いた。
……誰も、いない。
通りがかる生徒の姿すら、そこにはない。
だが、確かに誰かがそこにいた。そのことを、何故か理解している気がした。気配だけが漂うその重苦しい空気に、ぞくりとしたのだ。それは、肌を冷気が撫で上げる、その感覚に似ていた。動けば汗ばむほどの陽気だというのに、寒気がするほどのものを感じたのだ。
気がつくと、全身から汗が噴き出していた。暑さや運動で流すものとは意味を異にする、後味の悪い汗だった。
（何、今の……？）
らず速度を速めていた心臓の鼓動が、そこら中に聞こえているような錯覚に陥る。
何が起きているのか、まるでわからなかった。それでも、何もないはずだと自分に言い聞かせる。

たいしたことではないはずだった。今までだって、何事もなく生活して来たのだから、気にするようなことではない、と。

しかし、桜の中にある何かの感覚が、それが決して単純なものではないことを教える。その瞬間の空気はおかしいのだと、何かが気づかせる。

そして、それは全ての前兆だった。

2

その日の学校からの帰り、桜はいつものように学校を出て、いつもの道を辿っていた。そこまでは何も変わらない、日常だった。途中で足を止めたのは、誰かが後ろからついて来ていることに気づいたからだ。

それは、学校で感じたものとは違う。言うなれば、どこか懐かしいような気もする気配だった。

やはり、それも直感でしかなかった。誰かが教えてくれたわけでもない。自分の中にある何かが、それを教えた。そんな感覚だった。

「……誰？」

桜は振り返ったが、誰もいない。だが、すぐ近くに誰かがいるのはわかる。その直感に従って、姿を見せない相手に向かって問いかけた。

「そこにいるんでしょ。出て来なさいよ」

「あら、私のこと、わかるの」

向けた、視線の先。

ちょうど、桜からは死角になる建物の影から出て来たのは、同じ高校の制服を着た少女だった。

しかも、場違いなくらいの美少女だ。背の中ほどまである黒髪は、さらりと流れるストレート。勝気そうな瞳はやたらと大きくきらめいて、桜のことを迷いもなくまっすぐに見据えている。

「どうして、私の後をついて来るの？」

一瞬、その眼差しに吸い込まれそうな錯覚を覚えて、桜は眩暈がしそうになる。それを振り払うように頭を振ってから、信じられないものを見て愕然とした。

目の前の少女は、宙に浮いていたからだ。

浮いている、と言っても、常識外れに高い場所から見下ろされているのとは違う。少女は、地面すれすれの所にふわりと立つように

浮いていたのだ。おまけに、彼女には地面に落ちているべき影がなかった。
今日は、快晴だ。天高く、なんて言いたくなるほどのいい天気なのだ。こんな日に、影ができないなんてありえない。もし、ありえるのだとしたら、そんな存在は、おそらく、人ではない。
（……嘘、でしょう？）
背中を冷たいものが滑り落ちて行くような、そんな気がした。桜は唾を飲み込もうとして、口の中がからからに乾いていることに、その時初めて気づいた。
吸い込まれてしまいそうなほどの、少女の視線が桜へと注がれる。相手の姿形だけ見れば、場違いに綺麗なだけのただの女子高生に見える。なのに、そうではないことを彼女自身の存在感が教えているような気がした。
「あなたが、桜？」
形のいい唇が、楽しそうに言葉を紡ぐ。その内容に、桜は驚いてその少女を見返した。
見も知らぬその少女から、いきなり呼び捨てにされるとは思わなかった。初めて会った見も知らぬ少女に呼び捨てにされるような覚えはない。
桜はどうしようもなくムッとして、思わず言い返す。
「人に名前を聞くんだったら、そっちから名乗るのが礼儀じゃないの」
その切り返しに、少女は一瞬びっくりしたように目を瞬かせる。それから、にやりと笑った。
「ああ、そうね。あなた、それでも、あの人の色を受け継ぐのよね。敬意を示さなきゃ駄目かしら」
くすくすと笑って、その少女は桜を見た。
「私は緋月よ。今日はあなたの顔を見に来ただけだから、これで帰るわ。また、すぐに会う機会もあるから、その時に会いましょう？」
一方的にそう告げて、緋月と名乗った女は桜の前から消えた。文

字通り、消えたのだ。
そして、それは、桜が巻き込まれる諸々のできごとの、前哨戦にしか過ぎなかったのだ。

「……今のがそうですか？」
桜の姿が遠くなって見えなくなると、再び少女はそこに降り立った。音も無く降り立つ彼女の後ろに、ひっそりと立つ影がある。住宅の立ち並ぶその場にはまるでそぐわない、神職にある者を彷彿とさせる衣装は、少女の纏うありふれた高校の制服とは全く相容れない。けれど、付き従うように立つ姿は、どこか優美に彼女の雰囲気に寄り添っている。それは、まるで絵画に描かれた一対のようで、それでいてどこか相容れなさを含ませる不思議な感覚だった。
穏やかな声を発したその影は、ひどく秀麗な容貌を持った少年だった。青年と呼ぶにはまだ早いが、少年と呼ぶにはやや遅い、その頃合を脱し始めたアンバランスな印象。おそらく、見た者誰もがひっそりと溜め息をつきそうなほどに整った容貌にきつさを孕み、彼は苛立たしげに言葉を紡ぐ。
「僕は、認めたくありませんね」
「あら、随分と頑なね」
それは、どこかからかうような声音だ。青年は憮然とした表情でそれを聞き流し、再び口を開く。
「彼女を、認めるんですか？」
「……それは、わからないわ」
軽やかに、少女は笑う。
それはとても楽しそうで、青年はわずかに表情を歪めた。
自分には、今の状況を楽しめる余裕など欠片もない。だというのに、余裕を見せ付ける少女の態度がひどく腹立たしかったのだ。

「どうせ、覚醒もしていない半端な存在よ。あれが使えるかどうかなんて、まだわからないことだわ」
「……では、何故、わざわざ姿を見せたんです？」
「面白そうだからよ」
当たり前のように即答され、彼は面食らったような表情を浮かべた。何かを言いかけたものの、それを忘れてしまったかのように口をつぐむ。そんな様子を見て、少女は更に楽しそうにくすくすと笑いを漏らした。
「ずっと退屈してたの。誰も、あの人を超えられない。でも、あの子は違うわ」
「その器を持っていると思うんですか？」
「わからないわ。でも、今までとは違うの。蒼樹が、そう言ったもの」
「……でも」
「そんなに不満？」
悪戯っぽい笑みを浮かべ、下から覗き込むようにして問いかける。
「そういう……わけでは……」
彼は答えに詰まり、少女の眼差しから逃れるように目をそらし、視線を彷徨わせる。
「まあ、わからなくもないわ。あの人との絆が一番深かったのは、あなただものね、イナミ」
「……その名前で呼ぶのはやめて下さい」
「ふふ、どうしようかしら」
少女は笑って、空中でくるりとターンした。短い裾が翻り、下穿きさえ見えそうだ。誰もそれを気にしないだろうとわかっていても、その仕草に苛立ちが芽生える。
もし、ここにあの人がいたら、はしたないと諌めるだろう。そして、不満そうにしながらも、少女はそれに従う。自分には、それを受け入れてもらう器は、ないのだけれど。
「ところで」

と、少女の全身を眺めやって、彼は眉をひそめる。
「その格好は何ですか」
イナミ、と呼ばれた彼の纏うそれとは、まるで意匠の違うものを少女は纏っている。そんなに短い下衣で足元が寒くないのだろうか、下穿きが見えないのだろうか、と余計な心配をしながら、そう尋ねる。
「高校の制服よ」
「それは、見ればわかりますよ。さっきの彼女の通う高校のもの、ですよね。ですが、何故、あなたがそれを？」
彼女は、高校生ではない。それどころか、人間ですらないのだ。そんな彼女には、この世界の年齢での分け方など、関係のないことでしかない。
なのに、わざわざそんなものを着る意味があるとは、とても思えなかった。
「高校生というものを、体験してみようかと思って」
「……はい？」
あまりにも唐突に、それでいてまるで当然のことのように告げられた内容に、彼は自分の耳を疑った。
彼女の行動が突拍子もないのは昔からだ。それに困らされたことも、一度や二度ではない。それは、知っている。経験として、充分に。だが、いくら何でも、そういう方向から話が飛び出して行くとは思わなかったのだ。
「嫌とは言わせないわ。大丈夫よ、簡単だから」
「か、簡単って、何が」
ずい、と詰め寄った彼女の大きな瞳に真正面から覗き込まれ、たじろぐ。
この眼差しに見つめられると、動けなくなる。動くことを許されないような、そんな気がしてくる。
それは、彼女が魅力的な存在であるというのもひとつの理由だが、何よりも、彼女の方が潜在的な力の資質において彼よりも上である

ことの方が大きい。圧倒的な力の差の前には、屈するしかない。
力を持つ者には、抗えない。そういうふうに、世界はできているのだ。
「資格を持つ者なのか否か、値するべき存在であるか否か、近くで見なければわからないでしょう？」
「それは、そうかもしれませんが……。わざわざ出向くようなことですか？」
「だって退屈だもの」
当然のように胸を張った答えが返って来て、彼はげんなりとした様子で溜め息をついた。そうだ、彼女はこういう性質だった、と改めて思い出したからだ。
「あら、何か文句でも？」
そんな様子を見て取って、彼女は聞く。その問いかけに何とはなしに不穏なものを感じるが、今は見なかったことにした。
「いえ、ありませんが」
「じゃあ、問題はないでしょ？」
少女はあっけらかんと言い放ち、にっこりと笑った。その笑みは眩しささえ感じさせるほどに明るいもので、彼女の本質をよく現している。
彼女はまるで太陽のようね、とあの人が言ったのは、正にその通りだ。一瞬でその本質を見抜いたのは、あの人がそういう存在であったからに他ならない。それは、世界の理の、ひとつだ。
「私はね、ただ、待つつもりなんてないの。待つしかないなんて、そんなのは嫌。私たちが再びこうして集うことができたのは、何か意図があるわ」
「……全てはあの人の意思、とでも言いたいのですか」
もちろん、それを否定するつもりはない。否定してしまえば、ここにいることそのものが否定されてしまう。けれど。
「さあね。そんなことは知ったことじゃないわ。あの人の意思なんて、関係ない。これは、私自身の意思よ」

以前から変わらぬ意志の強さを垣間見せ、少女はきっぱりと言い放った。
「だから、あなたも通うのよ」
「……は？」
「楽しみね！　じゃ、また明日、学校でね！」
人の話など何ひとつ聞いていない素振りで言い放つと、少女は姿を消した。
「え？」
後に残された少年はぽかんとして少女の消えた空間を見やり、わずかに首を傾げる。
「学校……？」
何の話だ、それは。
少女の残した言葉を自分の中で反芻し、その意味することに気づいて青ざめる。そして、自分に拒否権はない。彼女が自分たちの主格を務める以上、その言葉に抗うという選択肢は存在しないのだ。
彼女の言っていることは、わかる。
再びここに集うことが叶って、既に半年あまり。
その間に大抵のことは学習し、それなりの知識は身につけたとは思う。それでも、自分の知っていた世界とはまるで違ってしまったこの場所に対する、戸惑いは大きい。彼女はあっけらかんと受け入れて楽しそうに振る舞ってはいるが、自分には無理だ。だから、極力関わりたくないと思っていたのに。
「誰か、嘘だと言って下さい……」
かぼそくつぶやいた声は、誰に聞き取られることもなく宙にほどけて消える。あれだけ騒いでいながら、周囲を通り過ぎて行く人々が二人に注意を払うことはない。人々はそこに誰もいないかのように、その場を素通りして行く。
実際、誰もいないのだ。人々は、そこにいる彼らを認識しない。認識しなければ、そこには誰も存在してない。
人々の目に、彼らの姿は映らない。それは当然の規律であり、覆

されないものだ。
　彼らの姿を自然に視界に映すことができるのは、ごく一部の人間でしかない。それは、自然との対話を営みの中に取り入れたわずかな血統の持ち主であることが多く、彼らの多くは巫女や神官などと呼ばれた。
　そうでない場合も、ある。彼らが選び、決めた相手にのみ、彼らはその姿を晒す。だから、つい先ほど、桜と呼ばれた存在が少女の姿を見たということは、そのままその資格を彼女が有するということに他ならない。
　彼女は、あの人ではないのに。
　あの人は、とうにいないのに。
　当然のことながら、彼らは人間ではない。自然の力を源に生きる精霊である。
　いや、元々の彼らにはその概念はない。ただ、そこに在るから存在する。それだけのことだった。精霊という名を授けてくれたのは、かつての主だ。自然の気の流れを読み、彼らと対話する術を生まれながらに知っていたあの人は、おそらく、普通の人間とは少し違った存在であったのだろう。
　あの人は彼らと会話を交わし、その力を知り、そして、名前をつけてくれた。その声で呼ばれる名は心地よくて、心が浮き立つのを感じた。
　あの人のつけた名は彼らの本質を現し、その存在を縛る言霊でもあった。
　それでも、彼らはあの人を愛し、敬い、主と定めて従った。主が死して後もその魂の行く末を求め、悠久の時の流れの先にその救いを求めて眠りにつくほどに。
　眠りは、長かった。
　彼らの感覚からすれば、それは、あっという間のことだったのかもしれない。だが、目覚めた時に感じたのは驚愕だ。見知った世界とはまるで違う、見知らぬ光景を見せる世界。精霊などという概念

を、とっくに忘れ去った人々の群れ。かつて在ったあの場所では、その眼に彼らの姿を映すことはなくても人々はその存在を信じていたというのに。

「僕は、どうしたいのでしょうね……？」

答えなど、ない。

あるいは、最初から求めてなどいないのかもしれない。

あの人は、いない。

遠い昔に、あの人は失われてしまった。

ならば、何故、自分はここにいるのだろう？

『イナミ』

あの人が呼んだその名は、今もこの身を縛る言霊として在るのに。

果たされることのなかった約束はそのままで、それに縋って今もその面影を追いかける。決して得られないかもしれないのに、諦めきれない想いがそこにある。

イナミは唇を噛み締め、何もない中空を睨み据える。

そうしてから、軽く宙を蹴るようにしてふわりと空へ舞い上がった。

どこに行こうという当ては、ない。

どこに行ったとしても、同じことだ。何もすることはなく、何かをしたいという欲求もない。彼女のようにこの世界に興味を引かれるように気持ちを切り替えられたのなら、少しはよかったのかもしれないけれど。

当てもなく空を翔けながら、ただ風の導くままに宙を滑りながら、想うのは。

自分の名を呼ぶ、ただ一人の声。

遠い時の向こうに消えてしまった、たった一人の愛しい人の面影だった。

「頑固よね」
少女は空を見上げ、溜め息をついた。
それは決して呆れたものではなく、仲間を心配する響きを持って憂いを含む。
「仕方がないですよ。彼が、一番あの人と縁が深かったんですから」
割り込んだのは、軽やかに響く甘い声音。同じように憂いを抱いたその声に、少女は小さくうなずいた。
「でも、あの人はいないわ」
一瞬、相手は息を呑む。わずかな沈黙を挟み、小さな声でその先が続けられた。
「わかっていても、求めてしまうことは変わらないと思いますよ？私たちだって、同じですから。諦めきれない想いを抱えているんです」
「……そんなこと、今更言われなくてもわかっているわ」
わかっているからこそ、割り切れない彼の気持ちがわかる。けれど、失われたものは戻らない。そして、あの人はそれを惜しんで泣くことを喜ばない。
誰よりもそのことを知っているのは、彼のはずだ。
あの人の傍に在ることを選んだ時に、その時間は有限であることを知らされた。あの人と自分たちとの時の流れは違う。それをわかっていて、契約を結んだ。命ある限り、その血の流れに従うのだと。
誰一人として、そのことを後悔する者はいない。おそらくは、彼も、同じだ。
あの人との約束はかけがえのないもので、それを無碍にすることは絶対にできないことを知っている。あれから気の遠くなるような時間が流れたことも知っているけれど、あの人の残した言霊は今でもこの身に宿るのだから。
だから、苦しい。そして、切ない。

言霊は今も息づくのに、あの人はいない。
それでも。
「私たちは、目覚めた。あのまま、永遠に続く眠りの中にいるはずだったのに」
「それには意味があるんだと、思います」
「……彼だって、それを知っているはず」
知っていても割り切れないのだろう、と落ち着いた声音が続けた。その声音どおり、落ち着いた様子を見せる物静かな風貌の少年だった。
「あんたの言葉を疑うつもりはないわ、蒼樹」
「そう」
蒼樹、と呼ばれた少年は、さほど感慨を受けることもなくうなずく。それは、彼のいつものことであったので、緋月は気にする様子も見せなかった。
「だからこそ、私たちは決めなければならない。あの人との約束を守るために」
優しいあの声を、決して色あせることのない鮮やかな想い出を、見知らぬ誰かに奪われないために。
「風が吹きます」
少女の声が、穏やかに告げる。
ふと見上げた先に広がるのは、あの頃と変わることのない蒼穹。
「そうね」
「それは、新しい風？　それとも」
「わかりません。ただ、流れが見えます。今は、それしか見えません」
「……あの子は、そうなのかしら」
思い返して、ふと、つぶやく。
「彼女のことを、疑っているんですか？」
「疑いたくないわ。私は、感覚を信じてる。でも、違いすぎるから、不安になるの。私がそうなんだから、イナミはもっとそうよね」

「それでも、さだめの風は吹く。私たちの意志とは、全く別の場所で」

だから？　と、再び重ねて問うことはできなかった。

たとえその流れが本意ではなくとも、そこに定められたものがある限りは言霊に従う。それが、遥か時の彼方から受け継がれた、あの人との約束なのだから。

3

同じような夢を繰り返し見ることに気づいたのは、いつのことだっただろう。

それは、夢と言うほど曖昧なものではない。けれど、現実に似たものであるとはっきり認識できるほど、鮮明なものでもなかった。言うなれば、水のような透明な膜越しに映画を見ている、そんな感じだった。

そこにいる登場人物が誰なのかは、知らない。何かを話しているように見えるが声は明瞭には聞こえないし、透明な膜に遮られているようで表情もよくわからない。それでも、その光景は延々と続いている。まるで、桜に見せ付けるかのように。

そして、どこか懐かしく、ひどくもどかしい想いを抱えて目が覚めるのだ。

「……また、あの夢」

まだ夜も明けきっていない時間に目を覚ましてしまった桜は、ベッドに身を起こし、溜め息混じりにつぶやいた。

ちらりと時計に目をやれば、いつもよりもかなり早い時間帯を指し示している。だが、既に眠気などというものはどこにも見当たらなかった。

これは、いつものことだった。

その夢を見た時は、決まって朝早くに目が覚める。

いつもは妹が起こしに来るまで惰眠を貪っていたいのに、この夢を見た時だけは違った。家族の誰もが寝静まっている、白々と夜が明け始めたその時間に覚醒へと導かれる。まるで、そうあることが当然であるかのように。

何故、とその理由を考えたことがないとは言わない。

けれど、そんなことを誰に聞いていいかもわからなかったし、胡散臭い夢占いみたいなものも信じられなかった。ただ、自分の中に

ある感覚だけが全てだった。これがただの夢ではないと、自分は知っているのだ。

「どうして……？」

そして、その夢をきっかけに目覚めてしまえば、もう眠れないことは経験として知っている。かと言って、今から起き出しても早すぎる時間だ。

桜は少し迷った後、パジャマの上に上着を羽織ってベッドから降りた。

窓を開けたことに、特に意味はなかった。

何となく、朝の空気を吸ってみようとか、殊勝なことを頭の片隅でちらりと考えたのかもしれないが、その時にはそこまで考えて行動してはいなかった。何の気なしに窓を開けて明けかけた空を見上げ、桜は文字通り固まった。

人が自然にいるはずもない高さに、ふわりと漂うように浮いている人影を見つけたからだった。

それは、まさしく漂うといった言葉がしっくりと来る風情だった。特に力んだ様子もなく、ただ、風に任せるようにその人影はそこにいた。

昨日の下校時に現れた少女などよりも、もっと不可思議な光景だ。彼女は、見た目だけは普通に見えた。滅多に見かけないほどの美少女ではあったが、桜と同じ高校の制服を着ていて、桜の前に歩いて現れたのだから。多少浮いているように見えても、影がなくても、その光景はちょっと見ただけではおかしなものに見えるものではなかった。

けれど、そこにいた人影は違う。

ぼんやりと中空を見据え、膝を抱えて身体を丸めるように宙に漂うその姿は、どう贔屓目に見ても普通の人間には見えなかった。ありえないほどに整った容貌は、どこか人間離れした印象を与えていて、その身に纏うのは、やけに古風な衣装だ。神社にいる者が着ている装束に似てはいるが、少し雰囲気が違う。何が違うのかはわか

らない。
ただ、漠然とそう感じただけのことだった。
桜がその姿を目で追っていると、彼女からの視線に気づいたのか相手がこちらへと視線を向けた。
「あ……」
一瞬、その表情が嬉しそうに崩れかけ、けれど、すぐにそれは何かを飲み込むように気まずげなものへと変わった。
「あなたは、何なの？」
声に出して問いかけてしまったのは、自分でも思いもかけない行動だった。
相手は驚いたように目を見開いて、桜を凝視する。
それから宙でふわりと立ち上がり、空を滑るようにして桜の目の前まで移動して来た。
「あなたには、僕のことが見えるのですか？」
見た目は、桜と同い年くらいに見える相手だった。やけに整った顔立ちをした、青年と呼ぶには些か線の細いシルエット。
けれど、その眼差しはひどく冷たさを孕んで突き刺さる。顔立ちが整っているだけに、向けられる怜悧な眼差しは底冷えのするものとなってそこに在った。
明け方の冷えた空気がそこに重みを加えて、桜はその視線に気圧されるようにしてうなずいた。
彼は困惑したような表情を浮かべ、目を伏せた。
「……どうして」
長いような短いような沈黙の末にぽつりと落とされた言葉は、決して桜に向けられたものではなかった。何かに耐えるようにきつく引き結ばれた唇は、言葉を探すように小さく震えている。
桜はしばらく黙っていたが、それ以上相手が何も言わないことに焦れて口を開く。
「あなたは、昨日の人と何か関係あるの？」
「昨日、の……？」

桜の問いかけの意味が即座にはわからなかったのか、彼はぱちぱちと忙しなく瞬きを繰り返した。
「緋月って名乗った女の子よ」
「……ああ、彼女ですか」
くすりと笑って、肩をすくめる。
「気になりますか？」
「気になるわよ。あなたも、あの子も、どう見ても人間には見えないから」
「ふふ、見る目だけはあるのですね」
彼は笑って見せたが、それが楽しんでのものではないことは一目瞭然だった。どちらかと言えば、こちらバカにしたかのような笑みだ。
「は？」
そのことにムッとして、思わず返す声音はきついものになる。
「……僕たちのことに関しては、自ずと答えがわかるでしょう。あなたが、あなたであるのであれば」
まるで、謎かけのような言葉だった。
それは、桜の投げかけた問いに対して全く答えてはいないものだ。
「それは、答えになっていない……！」
「僕と彼女が関係者であるかどうかという問いに対する答えであれば、是、と答えましょう。けれど、僕たちが何者であるかということに関しては答えられません」
「どうして？」
「答えたくないからです。今は、まだ」
彼は迷いもなく即答した。
だが、そこに、ついさっまであった冷たさは少し和らいでいた。
少なくとも、桜はそう感じた。
「あなたが自ら知るのであれば、僕たちは約定を違えることはしませんよ」
「約定……？」

彼の言っている意味がわからなかった。それでも、どこか責めるような響きさえも含むその言葉は、桜の中に妙な重みを持って落ちて来た。その感覚は、ついさっきまで見ていた夢の中で味わったものにも似ていた。

「……あなた、誰？」

「その問いにも答えられません。いえ、やはり、答えたくない、と言うべきでしょうか。その答えをあなたに告げること自体は、おそらく禁忌ではありません。でも、僕は、そうしたくはないのです」

穏やかに告げられる言葉は、響きだけは優しく耳に滑り込んでくる。だが、それは、強固な意志の許に紡がれる拒絶の言葉でもあった。

桜は呆然として宙に浮かぶ相手を見ていたが、それを無視するように相手はふっと姿を消した。まるで、朝の空気の中に溶け込むかのように。

変な時間に目が覚めたうえに変な相手に遭遇したせいで寝不足の頭を抱え、桜はだらだらと学校へ向かった。学校までの道のりが、いつも以上に遠い気がする。教室に着いた時には、既に疲労している始末だ。

もう帰りたい、と思いながらも自分の席に向かいかけた桜は、そこに思いもよらない光景を目にして固まった。

教室の、自分の席の後ろ。昨日までは確かにそこにいなかったはずの存在が、当然のような顔をしてそこに座り、頬杖をついてぼんやりと周囲を眺めていた。その人物には、嫌と言うほど見覚えがあった。

忘れられるはずがない。昨日の帰り、桜に声をかけて来た少女だ。昨日の今日でもあるし、あまりにも突飛な邂逅であったことは否定

できない。そんな存在が普通に教室の机に座っていたら、驚くに決まっている。しかも、昨日までは何の気配もなかったというのに、だ。

立ち尽くして凝視していると、その視線に気づいたのか、少女が振り向いた。

「あら、おはよう」

当たり前のように朝の挨拶を返して来たが、どう考えてもこの状況はおかしい。

「どうして、あなたがここにいるの？」

「クラスメイトだもの、いるわよ」

「……はあ？」

昨日までは確かにいなかったはずなのに、いきなりクラスメイトを名乗られても困る。理解の範疇を超えている。桜が困っているのが楽しいのか、昨日、緋月と名乗った少女はにんまりとした笑みを浮かべた。

「どういうこと？」

一応周囲を気にしながら、声をひそめて問いかける。

「私は、あんたのクラスメイトよ。そういうことになってるの」

「そういうことって……」

「まあ、細かいことを気にしなくてもいいわよ。あんたが考えたって意味のないことだわ。考えるだけ無駄よ」

「あの、えっと」

どうやら、何らかの方法でもぐり込んだらしいが、何のためにそんなことをするのか疑問に思うところだ。どう考えても、彼女―緋月は人間ではない。そして、今朝、窓の外に浮かんでいた男も。

そういえば、と思い返す。

あの男は、緋月と関係があることを肯定していたはずだ。そして、人ではないことも否定はしなかった。答えられない、と言っただけだ。

「聞きたいことがあるんだけど」

「……何？」
「古風な着物を着た結構カッコいい男の人は、あなたの知り合いなのか？」
「彼に会ったの？」
緋月はそれに驚いたらしく、大きく目を見開いて桜を見つめ返した。
桜があの男と会ったことは、緋月の中では想定外のことだったらしい。しばらくそうしていた緋月は、妙にもったいぶった表情で溜め息をつく。
「どうして、そうなのかしら……？」
「ねえ、どういう意味？」
桜が問いかけたタイミングで、担任が教室に入って来る音がして、緋月はぷいと横を向いた。
今は、これ以上話すつもりはないのだろう。そっぽを向いて窓の外を眺めているその様子から窺う限り、真面目に学生をやろうという雰囲気は、全く見受けられない。何をしに学校にもぐり込んでいるのやら、理解しがたい。
わけのわからないことばかりだが、緋月にしても、あの男にしても、人間でないことは確かなのだ。
桜に自分たちの姿が見えることを不思議がっていたのだから、そういうことなのだろう。それにしては、普通に教室に溶け込んでいる辺りが疑問だが、人間ではないのなら怪しげな術なり何なりを使っていてもおかしくはない。出席を取られて返事をしている光景に、思わず自分の目と耳を疑いたくなってしまった桜である。
釈然としないながらも自分の席に座り、後ろから注がれる視線に居た堪れない想いを味わいながらも一日を始めることになったのだった。

その日は一日、授業は全く耳に入って来なかった。何度か当てられて冷や汗をかいたが、どうにか切り抜けた。
その要因は、当然ながら緋月の存在だ。それを思いながら、帰り支度をするわけでもなく頬杖をついて窓の外を見ている緋月を振り返る。
多少なりとも説明を求める権利くらいは、あるはずだ。
とは言え、緋月の態度を見る限り、桜が納得する答えを返してくれるとは到底思えなかったが、せめてもの抵抗だ。
「それで、説明をしてくれるつもりはあるの？」
「何を？」
「あなたが、こんな所にいる理由よ」
学校をこんなところ呼ばわりするのもどうかと思いつつ、そう問う。
すると、緋月は聞こえよがしにも取れそうな、わざとらしい溜め息をついた。
「面白そうだからよ」
「はあ？」
「それ以外に理由なんてないわ」
端的過ぎる。それが事実なのだとしても、もう少しオブラートに包んだ言い方というものがないのだろうか、と思わずにはいられない。
「それより、私もあんたに聞きたいことがあるんだけど」
「私に何を聞いたってたいした答えは出てこないと思うけど」
「彼に会ったんでしょ」
一瞬面食らったが、それが、朝の男のことを言っているのだと気づき、桜はうなずく。
「会ったと言うか、見かけたと言うか……。今朝、窓を開けたら空に浮いていたから」
「……へえ」

緋月はやけに楽しそうにも見える笑みを浮かべる。
「あんたには、彼が見えたのよね？」
「それ、あの人も言ってた。普通は見えないものなの？」
「私たちが意識して見せようとしていない限りは、見えないわ。そういうものなの。今は、見せようとしているから誰にでも見えているけどね」
「あなたたちは、何？」
「知りたい？」
大きな瞳を悪戯っぽく輝かせて、緋月は下から桜を覗き込むようにして笑う。
その表情はやけに魅力的なもので、緋月が普通の少女ではないことを知っているのでなければ、素直に心臓が鼓動を速めたに違いない。相手が同性だとわかっていても、それは変わらなかった。
だが、緋月は普通の少女ではないのだ。
彼女が何者であるのか、何のためにここで高校生の真似ごとをしているのか、わからないままではうっかりときめくこともできない。いや、わかったとしても、彼女と関わると何となく苦労しそうではあるのだが、とりあえず、外見だけの話である。
「そりゃ、あなたにしても、朝の人にしても、謎であることは確かでしょう？」
「……あんたは、何も知らないのね」
「何の話？」
「ううん、何でもないわ。そうやって聞き返す時点で、知らないってことよね」
自分から話を振っておきながら、自分で勝手に納得してうなずいている。桜の話など、最初から聞く気がないようにしか思えない。
「私の話はまだ終わっていないんだけど……」
「ああ、そうだったわね」
全く悪いとは思っていないであろう様子で、緋月は桜に向き直った。

「とりあえず、行きましょ。ここじゃ……ね」
既に教室内に残っている生徒は少なくなっているが、それでも、いないわけではない。どんな話であれ、他の人間に聞かれて都合がいいものであるようには思えない。緋月や朝の男が、普通の人間ではないのであるのなら、当然のことだ。
「行くって、どこへ？」
「ついて来ればわかるわ」
そのまま、桜の返事を待つこともなくさっさと歩き始めた緋月の後を追い、桜は慌てて彼女に並ぶ。何かを話しかけて間を持たせようかとも思ったが、何となく気圧されてしまって口を開けずにいた。
謎だ。謎過ぎる。
昨日から、妙なことが多い。桜の周りでは、おかしなことが起きすぎている。
放課後に感じた変な視線のこともそうだし、いきなり現れたこの緋月という少女もそうだ。おまけに、朝っぱらから空中散歩中の男と遭遇までしてしまった。ついでに言えば、二人とも最初から桜のことを知っていたふしがある。これを、おかしなできごとと言わずして何と呼べばいいのだろう。
緋月が向かったのは、特別教室などが入っている棟だ。特に授業で必要がなければ、縁のない場所である。緋月の目的の場所は決まっているのか、その足取りに迷いはない。ひとつのドアの前で立ち止まると、誰かの在室を確認することもなくドアを開けた。
「来たわよ！」
勝手知ったる、といった様子でずかずかと中に入って行く緋月を見てから、桜はその部屋の入り口にある表示を見上げる。そこのプレートには資料室とあるが、ちらりと見えた中はほぼがらんどうだ。
あるのは、会議机と数脚のパイプ椅子。
無許可で使ってもいい場所なのだろうか、と思うのだが、緋月はまるで頓着していない様子だ。
「何やってんの、早く中に入ってドアを閉めてよ」

入るのに躊躇している桜を振り返り、緋月が苛立たしそうに告げた。
「……え、あ、うん」
今ひとつ事情を理解しきれないまま、桜はドアを閉める。そうしてから、ようやくその部屋の中に緋月以外にも二人の生徒がいることに気づいた。一人は女子生徒で、もう一人は男子生徒。共に同じ高校の制服を着ている。
見覚えはないが、緋月同様に滅多に見かけない美少女だと、アイドルにでもいそうな涼しげな美貌の少年。
この学校の制服を着ているということは生徒なのだろうと思うが、緋月がああである以上、それを頭から信じることはできなかった。
「どういうこと？　こんな場所に私を連れて来て、何の意味があるの？」
「意味はないわよ。ただ、人に聞かれたらあんたが困るって、静流が言うから」
「はあ？」
「別に私はかまわないって思ったんだけど」
説明する気があるのかないのか、緋月の言葉は投げやりだ。ここまで連れて来ておいて、と苛立ちさえ覚える。
「あ、あのぅ」
そこで、最初から部室の中にいた二人のうち、少女の方がかぼそく声を上げた。緋月とはイメージのまるでかぶらない、あどけない印象を与える少女だ。同じ美少女という言葉で括っていても、緋月とはタイプが違う。男女の区別はともかく、何となく守ってあげたいような印象を抱かせる。そんな相手から縋るように見つめられてしまうと、桜は緋月に抱いた苛立ちがわずかながらも消えていくというものだ。
「その、私たちは、こちらが意識して見せようとしない限りは、普通の人間の目には映らないんです。でも、あなたは違うから。普通の人間だし、もし、変なふうに思われちゃったら困るし……」

「それは、私が緋月と話しているつもりでも、他の人間には私が独り言を喋っているように見えるかもしれない、ということ？」
「そ、そうです」
「別に、人の目なんか気にしなけりゃいいじゃない」
緋月は何でもないことのように言い放ってくれたが、桜としては、さすがにそういう事態は避けたい。緋月と交わした会話はさほど多くはないが、彼女が相当に我の強い性格であることはわかろうというものだ。
もし、この少女の言葉がなければそういうことになっていたのかもしれないと思うと、ありがたい。
「あなたはそれでいいかもしれないけど、私は違うわよ」
「小さいことを気にしたらだめじゃない」
「小さくないわよ！」
一人で何かと話している変人と思われるのは、あまり嬉しくない。桜が憮然として言い返すと、緋月は不服そうに口を尖らせた。
その態度に腹立たしさを覚えもしたが、今更、何も聞かずに帰るのはもっと癪だった。
緋月の言葉を信じるのなら、おそらく、この二人も人間ではないのだろう。朝の男も含めれば、四人。人間ではない存在が集合していることになる。
どういう理屈だ。
頭痛がして来そうだが、これが現実だ。昨日からこんなことの連続で、何かがおかしいのは確かなのだ。
「私たちは、人間ではありません。たぶん、彼女から聞いていると思うんですけど……」
「それは、聞きました。私には、あなたたちは人間にしか見えませんけど」
その言葉は、本音だった。
緋月にしても、最初のことさえなければ、風変わりなクラスメイトくらいの認識でしかなかっただろう。

どういう方法を使ったのか知らないが、緋月はクラスの一人として普通に存在していた。佐山や他のクラスメイトにそれとなく聞いたところ、四月から同じクラスだと言っていたから驚きだ。昨日までは存在していなかったはずの生徒を、何故か知っていると言うクラスメイトに、ちょっとした恐怖にも似たものを覚えたのも事実だ。

そんなことができる力を持っているのだとしたら、たとえ人間だったとしても、正直、得体が知れない。

だが、緋月を疑う気になれなかったのも事実だ。何故だかはわからない。口調や言っていることはどうかと思うものの、緋月からは敵意を感じなかったからかもしれない。そして、それは、緋月以外の二人の少女からも同じだった。

ただ、朝の男は別だ。あの男からは、かすかにではあったが桜に対する敵意にも似たものが感じられた。

「見た目は、たぶん、あなたと変わらないと思うんです。でも……」

あどけない表情を緩ませて、少女は笑う。

「証拠を、見せますね」

そう言ってすっと上げた彼女の手の指先から、きらめく何かが零れ出る。一瞬、それが何であるかわからずにぽかんとして見ていた桜だったが、すぐにそれが水の流れであることに気づいてぎょっとする。

彼女の指先から零れ落ちた一筋の水の流れは、空中で静止して複雑な文様を描く。それが人間の力で為せる業ではないことは、一目瞭然だった。

「私は、静流です。水を司る力を与えられています。それから……」

「蒼樹。属性は地」

それまで言葉を挟むことなく立っていた少年が、抑揚なく告げる。それに割り込むようにして、緋月が口を開いた。

「で、私が緋月。見ればわかるわよね」

「わかるって、何が」

「ああ、もう、鈍いわね！」

「あなたのその説明では、理解は難しい。彼女にその知識は乏しいのだから」
苛々とした様子を見せる緋月に、またしても少年—確か、蒼樹と名乗っていた—が言葉を挟む。
「でも、私、そういうのって苦手なのよ。静流、お願い」
「ひえっ、わ、私だって無理ですうう」
「……」
三者三様に押し付けあって、埒が明かない。しばしの押し問答の後、ほとんど口を開かなかった蒼樹が進み出た。
「あなたがすぐにわかるように説明するのは、難しい。それでもいいか？」
「……うん」
どんな話が出て来るにしても、何も聞かなければ理解するもしないも判断はできない。そもそも、ここに連れて来られている以上、既に巻き込まれているのだから、説明をしてもらう権利はあるはずなのだ。
蒼樹はあるかなしかのごとくにわずかにうなずいて、再び口を開いた。
「あなたが今までの流れで考えている通り、私たちは人間ではない」
桜がうなずくと、彼女はそれを確認するようにちらりと視線を動かした。
「あなたの理解できる言葉で言い換えるのでなら、精霊という言葉が妥当。私たちは、自然のもたらす力を糧にして生きている存在だから」
彼の説明を要約すると、彼女たちは、かつて、地、火、風、水の四精霊と呼ばれていた存在なのだと、そう言った。
にわかには信じ難い話だ。
だが、彼女たちが人間ではありえないことは肌で感じている。そのうえで、力の片鱗を見せられてしまえば、信じるより他にない。
信じたくなかろうが、彼女たちは人間ではないのだ。その言葉を

信じるのであれば、精霊ということなのだろう。
「で、その精霊とやらが、私に何の用なの？」
「あなたは、私たちを統べる巫女の血を引いている」
「……は？」
咄嗟には告げられた言葉の意味がわからず、桜は目を瞬かせた。
「何の話、それ」
巫女とは何だ。そう言われて最初に思い浮かぶのは、神社にいるアレである。だが、そうだとしても、自分の家は神社とは縁もゆかりもないはずだ。なのに、いきなりそんなことを言われても受け入れられるはずがない。
「私の家は神社じゃないわよ」
「厳密に言えば、そういう意味での血脈ではない。魂の流れとか、そういう意味での血脈になる。あなたの家の血統を辿って行けば、もしかしたら本来の流れに辿り着くかもしれないが、それはさして重要なことではない。大切なのは、魂に刻まれた古の記憶」
何のことやら、意味がわからない。
それでも、彼が本気でそれを言っているのだということは伝わって来た。そう感じているから、桜は冷たい反応を返すこともできない。だが、そんなことを言われても、実感などまるでないのだ。
「今すぐに、あなたにそれを信じてもらおうとは思わない。あなたにとって、私たちの存在は異質。そして、この世界にとっても。……でも」
やけに真剣な眼差しで桜を見据え、彼女は言った。
「あなたの魂がそこに在る限り、あなたは狙われる。現状、危険なのは、あなただ。このまま放置しておけば、あなたは遠からず殺されるかもしれない」
「はあっ！？」
迷うことなくあっさりと告げられたのは、あまりにも容赦のない言葉だった。

4

遠く、遠い、昔。神や精霊と呼ばれるものが、今よりも人々の身近に在った頃。

彼らは、自由だった。他の何者にも縛られることなく、ただ、自然の息吹と戯れて過ごした。それが、当たり前だった。人の世の時の流れは、彼らには関係のないものでしかない。自分たちには関わりのない場所で、忙しなく流れていく人の世を眺めていることは、楽しみのひとつでもあった。

人の世の移り変わりは、面白い。

時の流れとは無縁の彼らにとって、一瞬のものだった。瞬く間に命の火を燃やし尽くして消える人の生き様は、興味深いものに過ぎなかった。

だが、積極的に関わることはしない。人の祈りに応えて力を貸すことは稀にあったが、それは、ほとんど気紛れによって為されるものであり、彼らにとっての人とは暇つぶしの材料でしかなかった。

そうして気儘に過ごしていた、いつかの季節。退屈を持て余していた彼らは、彼らの運命を変える人と出会った。

彼らの生きて来た意味も、それから先の全ても、まるごと変えてしまったのは、たった一人の人との出会いだった。

その人と遭遇したのは、偶然のできごとに過ぎなかった。彼らも、その人も、近づこうという意図を持ってそうしたわけではない。

その人と出会った場所は、人の世では神域と呼ばれる森の近くだった。

もちろん、それは人の世での呼ばれ方であって、精霊である彼らには関係のないものだ。それでも、神の息吹を感じられるその場所は、彼らにとって居心地のいい場所だった。神はそこにいることを、はっきりと感じさせる空気に満ちていた。

人間がどう感じているのかは、知らない。だが、その周辺が神域

と呼ばれ、奥深い場所には滅多に人が分け入って来ないことから考えると、畏敬の念を抱いているのかもしれない。だから、そこに人が来ることは稀だった。

それゆえに、だったのだろうか。

鬱蒼と生い茂る木々に紛れて近づいて来たその影に、すぐ傍に近づかれるまで気づかなかったのは。

何故気づかなかったのか、今でもわからない。今思えば、あれは、必然だったのかもしれない。あの人と、この力の全てを捧げてもひとかけらの後悔も抱かぬほどの魂と出会ったことが、ただの偶然であるはずがなかった。

その人は何の案内もなく、森から出て来た。鬱蒼と茂る森は昼でも薄暗く、道を知る者でなければすぐに迷ってしまいそうな様相を見せる。だというのに、その人は迷うことなく歩いて来たようで、たいして疲れた様子もなく、おまけに森を歩くには不向きすぎる軽装をしていた。

森が開けたそこには、澄んだ水を湛えた湖があった。その湖は彼らのお気に入りの場所で、年頃の人間の姿を取っての水遊びは珍しいものでもなかった。

いきなり何の前触れもなく現われた人間に、仮初のの姿のまま精霊たちは固まった。

少年の姿を取る精霊は仲間を庇うように咄嗟に警戒の構えを取ったが、相手の敵意のなさに次の行動をどう取るべきか選びあぐね、やはり固まったままだ。

「……やぁだ、水音がするから何かと思えば、精霊の水遊びだったのね」

邪魔をしてごめんね、と、屈託のない笑顔で言って、その人は水辺に腰を下ろした。

拍子抜けした、と言ってもいい。

彼らがいることを訝しく思うでもなく、それが至極当然であるかのように振る舞い、そして、そのことをさして気にしてもいない。

その上で敵意も何もなく、こちらを警戒することもない。のんびりとした調子で水の中を覗き込み、魚を見つけたと言って嬉しそうな声を上げた。

一体、何の目的でここに来たのだろう。何とも言いがたい微妙な空気に、彼らは困惑した。

そもそも、普通の人間には、彼らの姿が見えるはずもない。

彼らはごく自然にそこに在るが、人々はその存在を感じることはできない。それでも、人々は彼らの存在を信じ、敬い、彼らに祈る。豊穣を。安寧を。それらの願いの全てを、彼らが叶えられるわけではない。彼らは神ではないし、持てる力には限りがある。そして、たとえ神であっても、人の世に過度に干渉することは不可能なのだ。

人の世は人のもの。精霊はそこに干渉はしない。それが、決して犯してはならない規律。

そうは言っても、生来、彼らは好奇心が強い。突然神域に現れたその人に興味を引かれることは、当然の流れだった。人に関わることそのものは、決して罪ではない。人の世の流れに手を貸すことが、禁忌であるだけだ。

その人は、数日に一度、その水辺に現れた。

いつ来る、という明確な決まりごとはない。二日続けて来ることもあれば、数日、音沙汰がないこともあった。そして、ここに来て何をするというわけでもない。最初は、糧として魚を獲るのかと思っていたが、そういう気配もない。

ただ、水辺でぼんやりと時を過ごし、時折、魚にちょっかいを出して水と戯れる。彼らが見ていようが見ていまいが、その行動は変わらなかった。

不思議だった。

何者なのだろう、という疑問は、少なからずあった。

精霊の姿を見ることのできる者は、限られる。それは、選ばれた巫女の血統を受け継ぐ者であることが多い。祭祀を司り、神々の声を聞く役目を務める者がそれに当たる。この場所は神域に近く、神

職にある者がいてもおかしくはないが、そういった者は外出を制限されているのが常だ。
その人は、そういったしがらみとは無縁に見えた。
けれど、神職と関わらないのだと断じてしまうには、その気配は徒人にしては色がなさ過ぎた。俗世とはかけ離れた気配を身に纏いながら、それでいて、正式な巫女とは言えないその存在は不可思議であり、中途半端な印象さえ受けた。
お互いに存在を知っていながら、無関心を装った。その距離を保ったまま、どれだけの時が過ぎただろう。
それは、最初に会った時から、季節をふたつほど越えたくらいだったかもしれない。
ついに我慢しきれずにその人の前に舞い降りたのは、彼らの中での主格を務める、少女の姿をした精霊だった。
火の属性を持ち、火の姫と呼ばれる彼女は彼らの中で最も気が短く、我の強い性質を持っていた。こちらを関知しているはずなのに綺麗に無視をするその人に、苛立ちにも似た感情を覚えていたのは彼女だけではなかったが、そうやって行動に移したのは彼女が彼女であったがゆえだろう。
「ねえ、あんた、何者なの」
相変わらずのんびりとした様子で流れの中に遊ぶ魚を覗き込んでいたその人は、彼女の誰何の声を聞いて顔を上げ、にやりと笑った。
「……私の勝ちね」
「えっ」
それは、全く予想もしていない反応だった。面食らってその先を続けられずにいる彼女にかまうこともなく、その人は先を続けた。
「さて、どちらが先に痺れを切らすか、私としては我慢比べのつもりだったんだけど」
あなたの負けね、と、初めてここに来た時と同じ、屈託のない笑顔を浮かべ、その人は言ってのけた。
つまり、その人は、彼らが我慢できなくなるのを待っていたのだ。

何かをするわけでもなく、のんびりと。
そのことに驚いて、腹が立って、なのに、怒る気にもなれなかった。
負けた、と思ってしまったからだ。
元来、精霊たちは好奇心が強い。だからこそ、気紛れで人の世に関わろうとする。それゆえの禁忌が存在するのだ。精霊は人に深く関わってはならない。それは、この世の均衡を崩すものとなりかねないからだ。
それらの全てをわかった上で、その人はふたつの季節を待ち続けていたのだ。人の持つ時の流れが精霊のそれよりも短いことを思えば、それは驚くべきことだった。
「な……っ、あんた、わかって……！？」
「そりゃあ、そうよ。あれだけ興味津々に物陰から覗かれていれば、よほど鈍くない限りは気づくと思わない？　私は、これでも巫女の血統を受け継ぐのよ？」
さも当たり前のように言うが、そもそも、精霊を見ることができる者が少ないことくらい、その人だってわかっているはずだ。その言葉は、その人がそういう環境に当たり前のようにいる、その証でもあった。
「最初からわかっていて、私たちを無視していたってこと！？」
思わず叫んだのは、怒ったと言うよりも、単にからかわれているらしいことに対して、何とも言えない気恥ずかしさがこみ上げてきたからだ。こちらが気配を消して窺っていたつもりだったというのに、向こうはわかっていたというのだから、そう思っても無理はなかった。
「別に、無視していたわけじゃないわよ」
と、その人は笑う。
その笑みに、何だか毒気を抜かれる。
「精霊と人は、関わらない。その方がいいでしょう？　それが、世の理というものよ。それでも、言葉を交わすくらいなら許されるわ。

たとえ、私のような半端者でも、ね」
「半端者……？」
首を傾げて問い返せば、そうだよ、と、その人は寂しそうな表情になった。
そして、内緒話だから、と言って、秘められたその生まれを教えてくれた。
神域の巫女を母に、都の高名な人を父に。
決して生まれてはならない、人の世では認められることのない存在であることを。それでも、父と母は愛し合っていた、だからここに私がいるんだよ、と、語るその声は優しかった。人の交わす愛の何たるかを、精霊たちは知らない。理解できない。それなのに、その人の語る父と母の物語はとても魅力的に思えて、精霊たちはその想いに憧れた。
父たる人は無実の罪で処刑され、母たる人はその咎を問われて巫女の任を解かれ、既にその身はこの神域からは遠い都に在った。傍らに父も母もなく、都の政とは関わることもなく、ただ、幽閉も同然に生かされているだけの日々。それでも、こうやって、一生を穏やかに過ごして行くのだとその人は言った。
半ば幽閉に近くても、父と母の身分ゆえに存在すら秘匿するしかなく生かされているだけであっても、ひとたびこの世に生を受けたなら、と。
その想いに、その孤独に、それでも溢れてくる彼女の優しさと穏やかな心に焦がれ、想いを傾けた。
そして、それは、自然の理の中に生きる精霊である彼らが初めて知る、思慕の情だった。
互いに話すことは他愛もないことで、その人から何かを求められたことはなかった。人は祈り、何かを求めることが当然だと思っていたのに、その人は何も望まなかった。何か望むことはないのかと尋ねれば、何もないよと穏やかに答えた。
望むものも、求めるものも、そこにはない。

ただ、穏やかに流れる時があるだけ。
それは、心地のよい場所であり、時間の流れだった。無理難題を祈られ、それが叶わぬと知って嘆きと怨嗟の声を上げられることもなく、その人と過ごす時間は穏やかに優しく甘くそこに在った。
夏の太陽の下で水と戯れ、秋の実りに感謝しながら大地に寝転び、冬の風に舞い散る雪の美しさに声を奪われ、春の訪れに緑の息吹を感じて歓声を上げた。
季節の移ろいがそれほどまでに美しく、心を動かされるものだとは、それまで知らなかった。彼らにとって自然とは自らの力の源であり、そう在って当然のものだったからだ。それらが牙を剥き、襲いかかることなどありえない。そこに、人と精霊との相容れない圧倒的な違いがあるのだ。
人が自然に対して抱く喜びの、恐れの、その意味を教えてくれたのは、その人だった。自然に対して人が祈り、嘆き、歓喜する、その意味。それを知るだけで、世界は色鮮やかに姿を変えた。
その人の言葉で、その人の存在がそこに在るだけで、何もかもが変わった気がした。
そうして過ぎて行く時間以外に望むものなど、何もなかった。なのに、それだけでは足りなくて、力の全てを捧げたいとねだれば、その人は困ったように笑った。
「困ったわね。私は、そういうつもりであなたたちと関わったわけじゃないんだけど」
「でも、私たちはあんたのために力を使うのを躊躇わないわ。それは、駄目なこと？」
「……駄目ではないわ。でも、その必要はないのよ？」
この地は、こんなにも穏やかで、平和なのだから。人の持つべき力を凌駕する精霊の力を使ってまで為したいことなど、何もないのだから。
「じゃあ、せめて、言霊で私たちを縛って。あんたのため以外に力を振るうことができないように。あんたの言霊で、私たちを眷属に

して」
躊躇うその人に、どうしてもと食い下がる。力を捧げることを望まれないのならば、せめて、その命のある限りは付き従うことを誓いたかった。
「……では、あなたたちに名前をつけてあげる」
重ねられる懇願に、折れたのはその人の方だった。苦笑しながらも、名前を授けて言霊で縛る誓約を交わすことを了承してくれた。
名は言霊。名は縛り。それが、誓約を捧げる相手から授けられたものであるのなら、それは彼らの全てを支配する。
精霊である彼らに、人から呼ばれるための名はない。本質を顕す名は持っているが、それだけのことだ。人は、彼らの名を呼ぶ術を持たないからだ。
幾度となく懇願に負けて、その人は名を授けてくれた。人の言葉で彼らの本質を置き換え、優しい声で名を呼んだ。それは、彼らを縛るためのものではない。護るための名であり、共にあるための名だ。授けられた名を呼ばれるだけで、それは、至福の時だった。優しく穏やかに過ぎる時間は、そうして積み重ねられて行くのだと信じて疑わなかった。
けれど。
別れは、突然にやって来た。
人と精霊との時間の流れは違う。いずれ永劫の別れが来るであろうことは、最初から知っていた。それでも、それほどまでに早くその時が訪れるとは、誰一人として考えてはいなかった。
穏やかに過ぎて行くであろう時間を壊したのは、やはり人の世の都合だった。
俗世を離れ、幽閉に近い状態で神域に閉じ込められていたその人を、都の人々は恐れた。何の力も持たず、何を望むわけでもなく、ただ自然のもたらす理のままに生きて行くことだけが望みだったその人を、咎人の血を引くというだけの理由で罪とした。生きていることさえも罪だと、何の根拠もなく決め付けた。その咎でさえ、陥

れられた結果のものであったというのに。
「呼んで下さい……！　我らの名を！　我らは、あなたのためであれば全ての力を捧げても悔いはないのです！」
切り立った崖の上に追い詰められ、進むことも戻ることもできずに佇む影に向かい、声を限りに叫ぶ。狩りの獲物のように追い立てられ、血と汗と泥にまみれても尚、その姿は美しく聡明で、その唇は笑みを忘れてはいなかった。
名を授けられ、その名の持つ言霊によって縛られた身では、力を自在に振るうことはできない。それを望んだのは自分たちではあったけれど、彼女の危急の時にすら呼ばれないのであれば、何の意味も為さないことに気づいた。
そのことが悲しくて、悔しくて、そして、それ以上にこんなことを引き起こした人の世が憎かった。
差し伸べた、手。たった一人のために捧げた、言霊に縛られる誓約。そのことを悔いるつもりはない。悔いるくらいなら、最初からそんなことは望まない。彼の人こそ、全てを捧げるに値する人であったことを疑ってはいない。それでも。
望まれないのなら、彼の人の命を救うこともできないのなら、その誓約にすら意味はないというのに。
「あなたが望むのなら、この国の全てを滅ぼしてもかまわないのに……！！」
血を吐くような叫びに、いつもと同じ、穏やかな笑みが返された。
「駄目よ」
たった一言、そう告げる。
何故、と、声にならない嘆きが零れ落ちる。こんな結末を見るために全てを捧げたわけではない。穏やかに笑って、死出の旅路に飛び込もうとする人を、見たかったわけではなかったのだ。
ただ、笑うあの人の傍にいたかっただけだ。あの優しい声で、名前を呼ばれたかった。笑ってくれるのなら、その声が聞こえるのなら、それでよかった。それだけだった。

なのに、人が、それを奪う。
幸福を、安らぎを、安寧を。ただ、そこに生を受けたという、それだけの理由で。
そんな国など、滅ぼしてもかまわない。あの人のいない世界など、失われたってどうでもいい。たとえ、それが国を守護する神を敵に回す大それたことであろうとも、授けられた名に懸けて命を削ることも厭わないのに。
「人に害を為すことに、あなたたちの力を使ってはいけない。たとえ一時の激情で為したことであったとしても、いずれそのことで傷つくのは、あなたたちなのだから」
どこまでも優しくて悲しいその言霊は、自らの命の終わりを前にしても、揺らぐことはなく。
「……愛してるわ」
その先の言葉は、吹き抜ける風の音に紛れて聞こえなかった。唇だけが動いて、ひとつの名を刻む。
聞こえない。何と呼んだのか、風の音に紛れて、何も。
……いや、知りたくなかった。
その声が、言葉が、最期と思い知らされたくなかった。
「あ……っ」
自らを縛る言霊の鎖を引きちぎり、空を駆ける。その命を繋ぎ止めたくて、失いたくなくて、そのためならば逆らうことの苦痛など何も怖くなかった。
目の前で、彼の人の身体が、ぐらりと揺れた。何をするのか、止める言葉を叫ぶ隙もなくその爪先が地を蹴り、激流の中にその身を躍らせる。
「あ……あっ、あああああっ！！」
「嫌――……！！」
水守の少女が、我が身の危険も省みずにその姿を追って流れの中へ姿を消す。けれど、彼女の支配下にはない激流はその願いを撥ねつけ、何もかもを押し流して行く。

伸ばした手も、迸った悲鳴も、何も、届かない。激流の中に消えた人は、二度とその姿を見せることはなかった。

5

「……っ！！」

桜は自分が上げた悲鳴に驚いて飛び起きた。

心臓が恐ろしいほどのスピードで脈打ち、恐怖にも似た震えが身体の内を走り抜ける。

荒く息をついて、そこが自分の部屋のベッドであることを知る。たった今感じた恐怖が夢であったことに安堵し、再びそれを思い出す感覚に身を震わせた。

それは、いつもの夢だった。だが、今までは薄い水の膜を通した映画のように見えていたものが、変わっていた。桜はその映画の登場人物となり、その痛みや喜びを自分のものとして感じていたのだ。

こんなことは、初めてのことだった。今までは、どんなに知りたくともその詳細を見ることはできなかった。だというのに、あまりにも鮮明に脳裏に焼きつくその夢の残滓に、束の間、夢と現実との境目がわからなくなる。

リアルすぎて、吐き気がしそうだ。

汗ばんだ額を手の甲で拭い、深呼吸を繰り返す。

全ては夢なのだと言い聞かせなければ、境界線が曖昧になって夢に飲み込まれてしまいそうだった。

「何、今の……？」

わからない。

ただ、何かが変わろうとしている。それは、誰かに教えられるでもなく身体の奥で感じる予感だった。

時計を見れば、まだ早朝だ。この夢を見た時の常として、夜明け頃に目が覚める。今日も同じだったらしい。だが、二日連続でこの夢を見るのは初めてのことだ。

いや、厳密に言えば、同じ夢とは言えないのかもしれない。今日の夢は、今までのものとは明らかに様子が違っていたからだ。これ

までのどこかぼんやりとしたイメージから一転して、生々しいほどに刻み込まれた夢の中の風景は、まるで現実に起きたできごとのようにも思える。追い詰められ、激流に身を躍らせた瞬間の身を切り裂くような強い風の音が、今も耳に残っているようだった。

ぶるりと頭を振って、夢の名残を追い払おうとする。

嫌な汗でべたつく身体が不快だが、この時間にシャワーを使うのも家族に迷惑だ。この目覚めがいつもの夢のもたらすものと同じであれば、この先はどうあっても眠れないはずだ。二日連続でこれとは、全くもってついていないと言うべきか。

溜め息をついて、ベッドから降りる。

着替えるかどうか迷って、後でシャワーを浴びてからにしようと思い直した。そうしてから、何となく予感を覚えて窓に歩み寄る。

何故だか、昨日と同じように、あの男がそこにいる気がしたのだ。

迷うことなくカーテンを引くと、驚いたようにこちらを見ている男と目が合った。その驚いた様子からして、桜が起き出して来て窓を開けるとは思っていなかったのだろう。

「……ねえ」

躊躇わずに窓を開けて、空中で立ち尽くすようにしてこちらを見ている男を手招きする。その様子はあまりにも頼りなげで、どこか寂しそうで、放っておけないような気がしてならなかった。

「そんな所にいるんだったら、中に入って来たら？」

「何故ですか」

わずかに棘のある返答は、昨日と変わらない。だが、それを不快だとは思わなかった。

「私が気になるから」

早くして、と急かせば、不承不承といった様子で彼は降り立った。改めて近くで見ると、無駄に整った顔立ちであることに気づかされる。いきなり学校にまで乗り込んで来た緋月たちと言い、精霊というのは人間離れした容貌の持ち主らしい。

「何か御用ですか」

「それを聞きたいのはこっちの方なんだけど」
「……僕には、あなたに用事などありませんが」
「じゃあ、どうして、こんな時間に私の部屋の前にいるの？」
「それは……」
一瞬言葉に詰まり、それから、ぼそぼそと先を続ける。
「散歩です」
無理のある言い訳だということは、おそらく、本人もわかっているのだろう。桜からの視線から逃れるように目をそらす辺りがそれを現している。
「散歩ねぇ……」
思わず半笑いになると、ムッとした表情で睨まれた。
無理があることはわかっていても、それを指摘されるのは気に入らないらしい。その刺々しい態度にどこか懐かしささえ覚えて、桜はうろたえた。
何故、そんな気持ちを抱くのかわからなかった。
「……顔色が、悪いですね」
ぽつりと、つぶやくように言葉が零れ落ちる。
変な夢を見たせいだ。それはわかっている。だが、それにこの男が気づいたということが、不思議だった。
「え？　ああ……その、夢見が、悪くて」
「夢……？」
その眼差しが、ほんのわずかだけ心配そうな色を乗せる。
「昔からよく見る夢なの。今日は、今までとはちょっと違ったから驚いただけ」
「違った、のですか……？」
「うん、そう。いつもはぼんやりとしか追えなかったストーリーが、いきなり鮮明になった感じかな」
思わずぺらぺらと事情を話してしまう自分を、不思議に思う。
そのことに意味があるのか、何が理由なのか、わからない。そもそも、あの夢を繰り返し見ること自体が不思議なことではあるのだ。

「どんな夢ですか」
「それは……」
説明しようと口を開きかけ、ふと気づく。この男の声を、夢の中で聞いたような、そんな気がしたからだった。
「あなた、名前は？」
思いつきのように尋ねると、はっとしたように身構えられる。その質問は、あまり歓迎できないものだったのかもしれない。だが、今更、口に出してしまったものは戻らない。
「何故、そんなことを聞くのです？」
夢の話で少しだけやわらかくなっていた態度が、再び頑なな様子に取って代わる。何がそれほどまでに気に入らないのか、桜にはまるで見当がつかなかった。名前を聞いたことがそれほどまでに不愉快なのか、と考え、それが先ほどの夢の中に出て来た最後の叫びを思い起こさせる。
名前を呼んで欲しいと、そう、悲痛な声で叫ぶ誰かの声を。
……あれは、一体、何を示しているのだろう？
「……ううん、緋月たちの仲間だと聞いたから、あなたにだって名前があるんでしょう？　そう思っただけよ」
「彼女から聞かなかったのですか？」
「聞いてよかったの？　何となく、そうしない方がいいような気がしたんだけど」
それは、別に何か意図していたことではない。ただ、何となくそうしただけだ。緋月はその場にいる少女たちの名前を明かしはしたが、この男については『彼』としか言っていなかった。とは言え、それについて深く考えたわけではない。
そこに、何か意味があるのかと考えたのは、夢を見たせいだとしか言えなかった。
昔から繰り返し見る夢に、変化が訪れた。それは、緋月たちと会ってからだ。そのことには、何かしらの意味があるような気がしてならない。

「……あなたは、僕たちの存在を不審に思わないのですか？」
まるで別のことを聞き返されて、桜は思わず苦笑を浮かべた。
「そりゃ、不審だと言うなら、不審かもしれないけど」
「では、何故」
「それがわかっていたら、あなたを部屋に招き入れたりしないでしょ。でも、あなた、どこか寂しそうに見えたから」
「どうして……っ」
桜の言葉に小さな声で呻くようにつぶやき、彼は唇を噛み締める。
「何もかもが違うのに、どうして、言う言葉は同じなんです……！？」
「……何の話？」
責めているかのような、悲痛な声音。桜が戸惑ったのに気づいたのか、決まり悪げに口をつぐむ。
「いえ、何でも」
「何でもないって感じじゃないでしょ。あなた」
「あなたには関係ありません！」
それは、拒絶だった。
緋月たちにしても、こちらの出方を探っている様子がある。そのぎこちなさを不思議に思わないわけではない。それでも、彼女たちは戸惑いながらも距離を測ろうとしているようにも思えた。だが、目の前のこの男にそういう雰囲気を窺うことはできなかった。
「僕は、認めません。たとえ、そうなのだとしても、あなたは違う！」
「違う、って、何が」
そんなことを言われても、わからないものはわからない。
その答えが気に入らなかったのだろう。桜を見据える眼差しが苛烈さを増し、ぶわりと風が巻き起こる。それまで穏やかに見えていた窓の外に、ほとんど風などない。不意に巻き起こった風に煽られ、カーテンが勢いよく翻った。
それが、目の前の男が起こしたものであることを、疑う余地はな

い。緋月の言っていたことを、唐突に思い出したからだ。この男の属性は――――風。気性が荒いのは火の属性である緋月が一番なのかもしれないが、暴走した時の歯止めが効かないのは風の属性を持つこの男だと地の属性を持つ少年があっさりと告げた。だからこそ、一番厄介なのだ、と。

「もう、二度と目覚めたくなんてなかったのに……！」

泣き出しそうな声で、叫ぶ。それは、聞く者に痛みさえもたらしかねない響きを持って、突き刺さる。

「僕は人が嫌いです。人の世なんて滅びてしまえばいいと思っています」

「でも、あなただって人と契約をしたから、今があるんじゃないの？　緋月たちがそうだって言っていたように」

「たとえ、そうだとしても！　それを奪ったのは、人です！」

開け放たれたままだった窓から、背後に飛び退るようにして男は屋外へと移動する。何もない宙に支えもなく立ち、彼は桜を見下ろした。音もなく吹き上げる風が髪を煽り、距離以上に二人の間を隔てているような気がした。

「ちょ……待って！」

手を、伸ばす。

相手は既に高く飛ぼうとしていて、今更届くはずがないと思うのに、その衝動を止められなかった。

届かない、手。その光景が、つい先ほどまで見ていた夢の光景と重なって、強烈に脳裏に蘇る。

あんな想いは、繰り返したくない。繰り返させない。味わうことも、味わわせることも。絶対に、そんなことだけは。

「待って……っ、イナミ！」

意識するわけでもなく、するりと口をついてその名が零れた。目の前の男の瞳が大きく見開かれ、食い入るように桜の顔を見つめる。

「何故、あなたがその名を？」

その声は震え、彼の動揺を現しているように思えた。おそらく、

それが本当に彼の名であるからなのだろう。
「……今のが、あなたの名前なの？」
確認するように問い返せば、目に見えて男の顔が強張った。
そこで、桜は確信する。その質問が、真実を言い当てているのだと。
「その質問に答える義務はありません」
「……イナミ」
「あなたがその名前で呼ばないで下さい！」
感情の波が高まったのか、叫んだその勢いのままに風の威力が膨れ上がる。
「僕をその名で呼んでいいのは……あの人だけです！」
その叫びは、どこか悲鳴にも似ていた。あの夢の中で、伸ばした手が届かない絶望に縁取られた絶叫と、同じだった。
「あれは……あなた、なの？」
ぐらりと、視界が揺れた。
頭の奥で、自分であって自分ではない存在が何かを言っている気がする。それを聞き取ろうと神経を集中させようとすれば、ひどい眩暈と頭痛に襲われた。
「……何、これ……っ！？」
立っていられない。眩暈と、それと同時に襲って来た鈍い痛みに、こめかみを押さえるようにして膝をつく。
駄目だ、と、どこかで声がする。
けれど、同じだけの強さで、知りたいと渇望する心がある。本能的に従ったのは、後者の方だった。
「大丈夫ですか！？」
音もなく傍らに降り立った影がやわらかな動きで肩を掴み、顔を覗き込む。語りかけられるその声音は先ほどまでの刺々しさを取り払い、案じるような響きを持って耳に滑り込んだ。強く閉じていた目を開けてみれば、色素の薄い茶色の双眸が手の届く場所にある。
「……イナミ」

手を、伸ばす。
今度は、遠ざかることなくその頬に触れる。桜の指先が触れた瞬間、びくりと震えたその反応が、ひどくおかしかった。
彼は、怯えているのだ。何かに。こんな立派な体躯を体現できるほどの力を持ちながら、怯えている。たった一人を失った過去を再び見るのが怖くて、最初から全てを拒んでしまえばいいのだと頑なに信じようとしている。
けれど、それでは、何も変わらない。
届いたはずのこの手が、意味のないものになってしまう。
「逃げないで」
「……僕は、逃げてなど」
「待てないの……？」
言葉が見つけられないのが、言わなければならないことがすぐ近くで引っ掛かっているのが、もどかしい。自分の中には確かに存在するはずなのに、それが形となって表に出て来ない歯がゆさがそこにある。
「私は、ここに、いるのに」
どうしてそんなことを言ってしまったのか、その言葉に何の意味があったのか、朦朧としかけていた意識では冷静な判断力などないに等しかった。それでも、そう言わなければならないと、告げなければどこにも進めないのだと、思考とは別の場所で感じていた。
目の前の秀麗な顔が、痛みで生理的に滲んだ涙で歪む。
「あなたは……あなた、なのですか……？」
問いかけられた声は、動揺を隠しきれずに震えていた。目尻から零れ落ちた涙が頬を伝い、首筋を滑り降りて衣の端に吸い込まれる。
その問いに対する答えなど、持っていない。ただ、自分でも知らない奥底から溢れる思いを言葉にした、それだけだった。
「行かないで……っ。あなたに置いて行かれるのは、もう、嫌です」
かすれた声で、懇願するように囁かれる。
強い力で、不意に抱きしめられた。そのぬくもりがやけに心地よ

くて、懐かしいような気がして、大きく息をつく。
これでいいのだと、誰かがどこかで教えてくれたような気がした。
そして、桜はゆっくりと意識を手放した。

6

——あなたは、魔を射るのね。

そうですよ。人の言う、形のある矢を射るわけではありませんが。

——その矢は、月まで届く？

どうでしょうね。そんなことを考えたことはありませんので、試したことはないですけど、あなたが見てみたいとおっしゃるのであれば、やってみましょうか？　月読の神に怒られるかもしれませんが、それもまた一興。

——神を怒らせて、面白いと思うの？　では、質問を変えようかな。私は海を見たことがないけど、波を砕くことはできる？

それも……どうでしょう。僕も、海を見たことがないのですよ。ご存知のように、水守の乙女は湖を守護する存在ですし、火の姫はああですし、蒼樹もああいう方ですしね。今まで縁はありませんでしたよ。ああ、でも、あなたがお望みなら、空を駆けてお連れしてもかまいませんよ？

——それは、楽しそうね。でも、難しいかな。私は神から嫌われているから、海神さまを怒らせてしまうかもしれない。

嫌う……？　あなたを？　何故、神はあなたを嫌うのですか。あなたは、こんなにも綺麗なのに。

——それは、ちょっと褒めすぎじゃないかな。

僕にとって、あなたはとても綺麗な人です。それは、間違っていますか？　おや、何故、そこで顔を赤くなさるんですか。

――うるさいわよ。

神に嫌われている、とは、どういうことですか？

――私の父と母は、人の世では決して許されぬ過ちを犯した。私は、生まれてはならない存在だから。

何故です？　生まれてはならぬ命など、どこにもありません。どんな命も、祝福を受けるべきです。

――たとえそうだとしても、私は、そうではないから。人の世の理は、それを許さない。巫女は、神以外の存在と通じてはならないのだから。

でも、愛し合っていらしたのでしょう？

――そうね。だから、私がここにいる。

それを許せぬと神が言うのなら、神というのは随分と狭量な存在ですね。過程はどうあれ、生まれ出る命の価値は全て同じだというのに。人も、精霊も、等しくあるべきでしょう。

――あなた、そんなことを言って、神が怖くないの？

あなたを失うことに比べたら、神など怖くありません。

――イナミ

え？

――波を射る、と書いて、イナミ。私のために神に向かって矢を射掛けてもかまわないと言うのなら、私は、あなたにその名を与えると約束するわ。

あなたのためになら、神を敵に回しても怖くはありませんよ。実のところ、僕は火の姫君の癇癪の方が怖いですし。……ああ、これは内緒ですよ。

――緋月はそんなに怖くないわよ。あの子、可愛いじゃない。

そんなことを言うのは、あなたくらいです。彼女を怒鳴りつけるなんて。火の姫君も、あなたに怒られるのは嬉しそうですけれど。……本当に、あなたという人は、稀有な人です。

――イナミ

はい。

――あなたの力の全てを、私に捧げて欲しいの。神域に仕える巫女の血を引きながら、名も無き半端な存在であるこの私に、全てを懸けてくれる？　私のことを守って、愛してくれる？

あなたの、望むままに。あなたが射よと命じるのなら、月を射ることも、波を砕くことも躊躇いはしません。神にさえこの矢を向けましょう。この手で神すら殺めてみせましょう。あなたのためにならば、僕は、何を失っても悔いはないのですから。

それは、誓約。
名も無き唯一の人に捧げる、絶対の誓いだった。

「……風が、動いた」
薄暗がりの中で、蒼樹がぽつりとつぶやいた。
「受け入れたのかしら？」
緋月は小首を傾げ、思案げに眉根を寄せる。我が強く、我儘を言うことの多い彼女ではあったが、仲間を想う気持ちは誰よりも強い。自ら望むことなく目覚めてからの間、頑なに全てを拒み続ける存在に頭を悩ませていたのは、誰であろう彼女だ。
緋月とて、複雑な想いを抱えていないわけではない。それは、緋月だけではなく、水と地を司る他の二人にしても同じことだ。
捧げた誓約は、彼の人の命と共に全て失われた。そして、再びその力を振るうことを拒み、彼女たちは永劫の眠りにつくことを選んだ。
……そう、目覚めるはずがなかったのだ。
彼女たちは、それを望まなかった。彼の人のいない人の世になど、何の未練もない。だから、自らの力を封印し、永遠の眠りについた。
目覚めた時は、驚愕した。二度と目覚めないように制約をかけて眠りについたはずなのに、何故か、妨げられた眠り。その要因が何であるのかを知るよりも前に、彼の人のいない世界で再び生きて行かなければならないことに嘆いた。
けれど、かすかに感じ取った懐かしい魂の気配。
それは今にも消えてしまいそうなほどに儚い存在感でしかなく、

辿るのは困難なものだった。それでも、諦めたくなかった。ほんのわずかな可能性であっても、彼の人の縁を辿ることができるのならば、そんな困難など苦ではなかった。

そうして、やっと見つけた。

同じ魂を持つ、たった一人の人を。その身に記憶はなくとも、宿す魂の色は同じ、稀有な存在を。

「どうして、あんなに頑ななのかしら」

「……彼は、あの人に恋をしていたから」

当たり前のように告げられた内容に、緋月は困惑して眉をひそめた。

「そんなの、自分だけだとでも思っているのかしら？」

彼の人を慕う精霊はいくらでもいて、それが自分たちばかりではないことは知っている。その想いが人の言う恋や愛と同じものなのかどうかは知らない。ただ、決して失いたくないかけがえのない存在であると認識していたことは確かだ。

それを、彼も知らないはずがないだろうに。

「彼の真意はわからない。……でも」

「安穏と構えていられないということも、事実ね」

「目覚めたことには意味がある。私たちは、あの人を守らねばならない。今度こそ、失わないために」

妨げられた眠りの理由。それは、おそらく。

「人の世の理など、私たちにはどうでもいいこと。あの至上の魂に害を為すのならば、それを排除するまで」

「そうね」

かつて、彼の人の命を奪った人の世の謀りごと。

同じことを、決して繰り返したりはしない。そうでなくては、こうして再び目覚めた意味はないのだから。

「静流からは、何も？」

「今のところは、何も。おそらく、向こうも出方を図りかねているはず」

「かつて存在を消しておきながら、それでも足りないと言うのかしら」
「人の考えなど、私たちにはわからない」
人と精霊は相容れることはない。それでも、互いを尊重することはできる。歩み寄ることはできる。それゆえに、あの人との穏やかな関係があったのだから。
「今度こそ、守る」
そうでなくては、ここに再び集った意味はない。
それが、ただひとつの願い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6939w/

桜舞う日

2011年10月1日03時12分発行